様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月１３日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：２００８　～　２０１０
課題番号：２０７２０１５５
研究課題名（和文）　小学校英語活動における児童の不安に関する研究

研究課題名（英文）　A Study on the State of Anxiety Felt by Elementary School Pupils during English Language Activities

研究代表者
松宮　奈賀子（MATSUMIYA　NAGAKO）
広島大学・大学院教育学研究科・講師
研究者番号：７０３４２３２６

研究成果の概要（和文）：
本研究では小学校英語活動における児童の不安の実態と，不安の強さと英語学習への好意や意欲との関係を明らかにすることを試みた。その結果，人前での発表や指名されることが不安の生起に関わっていること，高不安群の方が英語学習やスキル習得への意欲が高いこと，しかしながら同時に，高不安群は不安生起場面において回避や諦めなどの行為を取りがちで，前向きさと消極的さの相反する気持ちを抱えていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：
This study aims to investigate the state of anxiety felt by elementary school pupils during English language activities and also the relationship between the level of anxiety felt by pupils and their willingness and friendly feelings toward English learning. The result revealed that the situation they have to speak in front of other pupils is the main source of their anxiety. And the fact that the pupils with high degree of anxiety tend to have a fair willingness toward English learning however, they also incline to act negatively under anxiety provoking situations was found.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００９年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：英語教育・小学校・不安

１．研究開始当初の背景
（1）着想に至った経緯
小学校における英語活動は，楽しくあるべきであると強調され，「英語嫌い」を生みださないことが基本理念とされている（影浦，2004）。しかしながら，実際には学習年月が

経過するにつれ英語活動への好意が低くなった例（服部・吉澤，2002）や，活動に消極的な児童の姿も見受けられるようになってきた。このような好意の低下や消極的な態度の背景には何らかの心理的圧迫があるものと推察され，その 1 つが活動における「不安」ではないかと考えられた。児童期は新たな事象に関する興味関心が強く，異なるものを自然に受け入れられる時期と考えられているが（文部科学省，2001），初めて学習する外国語に対して不安を覚えている児童も少なくないのではないかと考えられる。「楽しい」英語活動を行うためには，児童の心理面への配慮も重要なことと考え，英語活動における児童の不安の実態と支援の方法を検討することとした。

（2）外国語不安に関する先行研究

外国語学習環境における不安についての研究は 1980 年代後半から盛んに行われてきた。その結果の多くが，不安とテストの成績などパフォーマンスとの間の負の相関を指摘し，それゆえ，不安は学習に妨害的に作用するものであるという見解を示してきた。しかしながら，これらの研究の多くは高校生や大学生など年長の学習者を対象としたものであり，児童期の学習者の外国語学習における不安を取り扱った研究はほとんどなかった。そこで，まずは小学校英語活動における児童の不安の実態を調査し，児童に対しても不安の妨害的作用が認められるのかを明らかにする必要があると考えた。その上で，児童の不安の状況に応じた支援の方策を検討することとした。

２．研究の目的

本研究は以下の 5 点を明らかにすることを目的とした。

（1）児童の不安の実態：どんな場面で不安を感じるのか等
（2）感じる不安の強さと好意や意欲との関係
（3）感じる不安の強さと不安生起場面における対処方法との関係
（4）感じる不安の強さと求める教師支援との関係
（5）児童の「安心した学び」を支援するための方策検討

３．研究の方法

本研究の遂行にあたっては，6 つの調査を実施した。

（1）調査 1：学級担任教員 122 名への質問紙調査

本調査においては，学級担任教員（以下，HRT）の目から見た児童の様子を尋ね，不安を感じていると考えられる児童や学習に消極的な児童の存在の有無を調査した。また，HRT が考える不安や消極的態度の要因を自由記述にて尋ねた。

（2）調査 2：小学校教員（教頭）1 名および英語活動外部講師（日本人英語講師，以下，JTE）1 名へのインタビュー調査

本調査は英語活動時における児童の様子をより詳しく知ること目的とした。2 名へのインタビューは別々に実施した。

（3）調査 3：小学校教員養成課程の大学 4 年生 92 名を対象とした質問紙調査

本調査は「調査 2」で明らかになった「指導者側の不安」の存在を受けて，英語活動を指導した経験が無い，しかし近い将来に HRT として英語活動を担当することになる大学 4 年生を対象に彼らの英語活動指導に対する不安を調査した。

（4）調査 4：児童 1,497 名を対象とした英語活動時における不安の実態調査（質問紙）

本調査は本研究の主たる調査である。児童の不安の実態および不安と学習意欲や不安場面における対処等との関係を明らかにすることを目的に実施した。対象学年は第 5 学年及び第 6 学年であった。本調査は北陸地方，関東地方，中国地方にある計 9 校に調査を依頼し，調査用紙のやり取りは郵送により行った。実際の調査は調査協力校の HRT によって行われた。

（5）調査 5：HRT5 名へのインタビュー調査

本調査は，調査 4 を受けて，児童がより安心して英語活動に参加できるためには，どのような支援あるいは授業への工夫が必要かについて，より具体的に考察することを目的として実施した。5 名の HRT は全員，英語活動の指導を経験しており，かつ大学院で学んだ経験がある者，教育委員会で指導主事を経験した者，エキスパート教員となる研修を受けた者で，英語活動に対する経験と理解を持つ者として調査協力を得た。3 名へのインタビューは別々に実施し，残る 2 名は合同でインタビューを行った。

（6）調査 6：大学 3 年生および 4 年生 123 名を対象とした質問紙調査

本調査では，大学生がこれまで英語を学んできた経験において，英語学習に特有の不安場面があったか，またそれを和らげるためにどのような工夫が考えられるかを尋ねた。本調査も調査 5 と同様に，不安を軽減する方策を模索することを目的として実施した。

４．研究成果

（1）調査 1

英語活動時に発話を嫌がったり，消極的態度を見せたりする児童が学級に存在するかどうかを尋ねたところ，「全くいない」と回答した HRT は 1 名のみであり，ほとんどの学級で活動や英語での発話に消極的な児童が存在することが分かった。また，回答者全体の 17.2%にあたる HRT が，そのような児童が「かなりいる」と回答しており，少なからず消極的な児童が存在していることが明らかになった。

また，その理由として考えられることを自由記述で尋ねた結果，8 割を超える HRT が「生来の性格（大人しい，恥ずかしがり屋等)」と回答したが，同時に「英語に対する自信のなさ」を挙げた教員も 6 割を超えていた（複数回答)。このことから，元々積極的に話すことを苦手とする児童に対する支援と，英語への自信を築くための成功体験の積み重ね，という 2 側面からの支援が必要であることが示唆された。

（2）調査 2

さらに詳しく英語活動時における児童の実態を知るため，2 名の教員にインタビュー調査を行った。そこからは，調査 1 と同様に消極的な児童の存在等が示されたが，さらに指導者である HRT の英語活動指導への自信のなさや授業への不安が，児童への適切な目配りや支援を困難にしている可能性が挙げられた。

（3）調査 3

調査 2 の結果を受けて，指導者の抱える不安はどのようなものであるのかを明らかにするために，実際の指導経験が無く，しかし近い将来 HRT として指導にあたることになる小学校教員養成課程の大学 4 年生 92 名に調査した結果，何を教えたら良いのか，授業のイメージがつかめないことや，指導計画を立てることへの不安，指導法を学習した経験が少ないことへの不安などが挙げられた。中でも，最も多数の学生から寄せられた不安が「英語への苦手意識に起因する不安」であった。

また，これらの不安が英語活動指導法に関する授業の履修を通して払しょくされたかどうかを尋ねたところ，約 7 割の学生が指導への自信が高まったと回答した。しかしながら，自らの英語力への不安は完全にはぬぐい去れなかった学生が多かった。

このことから，指導法の研修によって，授業そのものを進めていくことへの不安を軽減し，自信を高めることは可能であるが，最も不安に感じる英語力については，短い期間の研修では不安を払しょくするには不十分で，HRT が安心し，また自信を持って指導にあたれるようにするためには，指導に必要な英語力に関する研修も求められることが示唆された。

（4）調査 4

小学校 5 年生および 6 年生 1,497 名を対象とした質問紙調査により，外国語活動における児童の感じる不安の実態として以下のことが明らかになった。

①不安生起場面

6 割以上の児童が「みんなの前でひとりで発表する時，緊張する」，「答えが分からない時，充てられたらどうしようと思う」と回答しており，人前での発話や指名されることが緊張や「あがり」といった不安の生起に関係していると考えられる。しかしながら，人前での発話に不安や緊張を覚えながらも，「みんなの前で発表する時，どきどきしてうまく言えない」と回答した児童は 32%にとどまり，人前での発話に伴う緊張や不安が「うまくいえない」ということには繋がっていないことが推察された。

②男女差

英語活動における不安を尋ねる質問を 13 問用意したが，その全てにおいて女子の回答平均値が高く，より強く不安を感じる傾向にあることが明らかになった。また全ての項目において男女差は有意であった（5%水準)。

③学年差

全ての項目において 6 年生の平均値が高く，5 年生より不安が強い傾向が見受けられたが，統計的な有意差が認められたのは 13 問中 9 問であった。

④学外学習の有無による差

本調査の回答者のうち，約 3 分の 1 の児童が学外で英語を学んでいた。この学外学習の有無が英語活動時における不安とどのような関係にあるのかを調べた。その結果，全ての項目において学外で英語を学んでいない児童の方が不安が強いことが明らかになった。ただし，統計的有意差が認められたのは 13 項目中 8 項目であった。

また，着目すべき結果として，学外学習経験がない児童の約 6 割が「他のみんなの方が自分より英語が上手だと思う」と回答していることが挙げられる。児童は他者との比較により自分の英語力を低く感じることがあり，その傾向が学外学習経験を持たない児童で強いことが明らかになった。

この結果から，学外学習経験のない児童が英語を塾などで学習している児童と比較して，自信を喪失しかねない実態があり，学外で学習している児童だけが上手にできたり，活躍できたりするような内容ではなく，誰も

が挑戦したいという気持ちになり，また活躍の機会がある活動を計画することの重要性が示唆されたと考える。

⑤不安の強さと英語活動への好意・意欲

不安の強さを尋ねる 13 の質問項目への回答傾向から回答者を高不安群と低不安群に分け，それぞれの英語活動への好意や意欲について調査した。その結果，「英語の時間は好きだ」，「英語活動は楽しい」，「外国の人ともっと話してみたい」の 3 項目において，低不安群の方が平均値が高かった。しかしながらこれらの 3 項目のうち，低不安群と高不安群の間で統計的有意差が見られたのは「英語の時間は好きだ」の 1 項目だけであった。この結果から，低不安群は，英語活動そのものに好意を感じていると理解できる。

一方，発音や発話の理解，読み書き，外国文化の理解や日本文化の発信など，具体的なスキルの習得に関する意欲を尋ねる項目全てにおいて，高不安群の平均値が高く，意欲が高いことが明らかになった。

これまでの外国語不安に関する先行研究においては，不安は外国語学習を妨害するものと捉えられてきたが，本調査では，高不安群の児童の方がむしろ，学習に対して高い意欲を持っていることが示された。

⑥不安の強さと不安生起場面での対処

⑤に示したように学習に対する高い意欲を示した高不安群であるが，不安が生起しやすい場面においてどのように対処するかについても調査した。その結果，高不安群の児童は「分からない時，もう 1 度言ってもらってちゃんと分かりたい」など前向きな対処をすると回答している一方で，「間違えたくないから他の人と同じ答えを言おうとする」や「意味が分からないと，もうダメだとあきらめてしまう」などの消極的な対処を取るという回答も低不安群と比べて有意に高かった。

このことから不安が強い児童は，不安場面においても前向きに対処しようとする意欲は見られるものの，一方で，実際の不安場面においては，後向きの対処をしてしまいがちであることが示された。⑤において高不安群の意欲の高さについて言及したが，本調査からは，児童が前向きに頑張りたいと思う気持ちを持っていることと，実際の場面では回避や諦めといったネガティブな対処を取ってしまう傾向にあることが明らかになった。このことは，不安を強く感じる傾向にある児童が，前向きに取り組みたい気持ちと，諦めてしまいそうになる気持ちという，相反する感情を抱いていることを示していると考える。

⑦不安の強さと求める教師支援

高不安群の児童は不安生起場面において，低不安群と比較して有意に教師からの支援を希望していることが明らかになった。

以上の結果から，不安の強い児童が，既に英語活動に対する好意や意欲を喪失しているという事実は得られず，むしろ英語に関するスキルの習得に意欲的であることが明らかになった。しかしながら，他方で，人前で間違うことへの抵抗感が強く，間違いそうな場面や答えが分からなくなってしまった場面等においては，回避や諦めといった対処をしがちであるということも明らかになった。

高不安群は，前向きに頑張りたいという意欲が強いと考えられ，その前向きさゆえに，間違うことを恐れたり，不安を感じたりしている可能性が考えられる。この児童の不安な気持ちを理解し，高不安群の児童は特に教師からの支援を希望していることを意識して，指導を行うことが望まれる。例えば，児童が答えに詰まった時には，再度全体練習を行い，それを通して答えを理解する機会を提供する等の指導の工夫や，間違いを受け入れる支持的風土のある学級づくりを行うという，学級経営面からの環境づくりが支援の方策として考えられる。

（5）調査 5

調査 4 での結果をさらに具体的に考察することを目的に 5 名の HRT にインタビュー調査を行った。そこからは，発言しようとしていること自体を評価することや，”Pardon?” などと自由に聞き返せる雰囲気を作っておくこと，外国語活動の時間では全員が絶対に発言するというルールを作ることで，「できないのは自分だけではない」ことを知り，挑戦する環境を作るなどの支援の方策が挙げられた。また，全てを英語で指導して，児童を「全く検討のつかない世界」に置き去りにするのではなく，必要に応じて日本語で確認をしていくことや，言えない言葉がある時に，「もうダメだ」と諦めるのではなく，非言語など様々な方法を駆使して伝えることができることを体験を通して伝えていくこと，などの意見も出された。

このインタビューからは，間違いや挑戦することを認め，正解ではなく頑張りをほめる学級の雰囲気が重要であることが示されたと同時に，不安な児童は「無理に言わなくて良い」という方法で対処するのではなく，「無理にでも全員発話をする」というルールを決めることで，どんな発話も受け入れる雰囲気や，完璧である必要はなく，挑戦することが大切という雰囲気を作り出すことの重要性も示された。

不安が起こりやすい，一人で発話する場面を，不安の発生を恐れて除外するのではなく，それを乗り越えていく手立てを考えること

の大切さが本インタビューにおいて示された。

（6）調査 6

調査 5 と同様に，外国語学習時の不安支援の方策を探るために，これまで中高大と英語学習者であった大学 3 年生および 4 年生 123 名に質問紙調査を行い，外国学習特有の不安はどのようなもので，それを和らげる学級の雰囲気や教師の工夫としてどのようなものが考えられるかを調査した。

その結果，外国語学習に特有の不安のうち，最も多くの学生が感じる不安要因は英語の発音であった。たとえ綴りを読んで，大体の発音と意味が理解できていたとしても，その発音が完全に正しいかどうかの判断が自分自身では難しく，不安がつきまとうことが示された。

そのような不安を軽減する学級の雰囲気としては，誤りを受け入れる雰囲気があることが挙げられた。また，周りが無反応ではなく，反応を示してくれることで安心につながるという意見も出された。

これらの大学生が考える不安を緩和する学級の雰囲気や工夫は，調査 5 において HRT たちが提案した間違いや挑戦を受容する学級の雰囲気と同様のものであった。

以上の調査 1 から調査 6 により，児童の外国語活動における不安の実態として，以下のことが明らかになった。

・不安を感じている児童は存在する。
・人前での発話が主な不安生起場面である。
・高不安群における活動への好意及び意欲の喪失は見られなかった。
・高不安群は学習意欲は高いものの，不安生起場面では回避や諦めといった対処を取る傾向にあるため，何らかの支援を考える必要がある。
・高不安群は教師からの支援を希望している。
・児童の不安を和らげる方策として「学級の雰囲気」と発話場面の削除ではなく「発話はできる人，上手な人だけがするものではなく，全員するもの，というルールの設定」等が考えられる。
・発音に絶対の自信を持ちづらいことが外国語学習特有の不安要因と考えられるため，その練習段階で児童を急がせることなく，十分な時間を取り，自信を高めることが必要と考えられる。

一方，残された課題として，調査 2 において示された「指導者の抱える不安」の実態解明とその指導及び児童への影響がある。調査 2 のインタビューでは，指導者が指導に不安を覚えていることが，児童への十分な目配りができていない背景要因ではないかという意見が出されたが，調査 5 でインタビューした HRT からは，教師はプロであることから，自分自身が英語指導に不安を覚えていたとしても，児童への配慮ができないということは考えにくいとの意見が出された。しかしながら，HRT が楽しく，あるいは辛そうに活動に取り組む様子は児童へと伝わり，児童の反応として現れることが推察される。英語活動の指導経験の浅い HRT が抱える不安の現状を明らかにし，その児童への影響や，解消策を探ることは今後に残された課題であり，調査 3 がその足掛かりになるものと考える。

【引用文献】

影浦攻（2004）「『小学校英語活動実践の手引き』作成の基本的考え」．中央教育審議会初等中等教育分科会　教育課程回　外国語専門部会　第 4 回　資料 4, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/04070501/006.pdf

服部孝彦・吉澤寿一（2002）『英語を使った「総合的な学習の時間」　－小学校の授業実践』．東京：大修館書店

文部科学省（2001）『小学校英語活動実践の手引』．東京：開隆堂出版

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

1. 松宮奈賀子，小学校外国語活動における児童の不安に関する実態調査，広島大学大学院教育学研究科紀要第一部（学習開発関連領域），第 59 号，査読無，2010，pp.107-114
2. 松宮奈賀子，小学校教員を目指す学生の「外国語（英語）活動に関する演習科目」履修がもたらす学生の変容，国際教育学会機関紙『クオリティ・エデュケーション』，第 3 巻，査読無，2010，pp.111-134
3. 松宮奈賀子，小学校教諭の目から見た英語活動中の児童の様子　－児童の不安に焦点を当てて－，広島経済大学研究論集，第 32 巻第 1 号，査読無，2009，pp.73-91
4. 松宮奈賀子，小学校英語活動における「児童の不安の強さ」と「求める教師支援」との関係，広島経済大学研究論集，第 31 巻第 4 号，査読無，2009，pp.53-70

〔学会発表〕（計 3 件）

1. 松宮奈賀子，小学校外国語活動における児童の意識に関する調査　－不安に焦点を当てて－，日本教科教育学会第 36 回全国大会，2010 年 10 月 2 日，弘前大学
2. 松宮奈賀子，学級担任の目から見た外国語（英語）活動における児童の様子，第

10 回小学校英語教育学会（JES）東京大会，2009 年 7 月 20 日，東京学芸大学
3. 松宮奈賀子，小学校英語活動における「児童の不安の強さ」と「求める教師支援」との関係，日本児童英語教育学会第 25 回中国四国支部研究大会，2008 年 5 月 25 日，ひろしま国際センター

〔図書〕（計 1 件）
1. 三浦省吾・深澤清治編著，松宮奈賀子他 22 名，ミネルヴァ書房，『新しい学びを拓く英語科授業の理論と実践』，2008，pp.226-231

６．研究組織
(1)研究代表者
松宮　奈賀子（MATSUMIYA　NAGAKO）
広島大学・大学院教育学研究科・講師
研究者番号：７０３４２３２６

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし